



診察室の午後

白浜はまゆう病院
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

連休最後の日曜日、京都中にあり、そこには音楽が国立博物館に、桃山時代の流れ、描かれている鳥が生絵師、海北友松(かいほうゆうしゅう)の作品展を見に行った。海外の美術館に所蔵されている友松の作品も里帰りして展示されているとのこと、彼の作品が一堂に会するまたとない機会であった。

東山の爽やかな新緑が目にしみる
中、右手にれんが造りの旧本館を
見ながら、心躍らせて博物館の新館に向かった。開館時間の午前9時半に到着していたが、すでに20分待ちの長い列ができていた。

<56> 「海北友松回顧展」

の旧本館を

の花や椿や松とともに幻想的に描かれ、

目をついてのは、「松に吠々鳥(ははちよう)図襖(ふすま)」と呼ばれるお寺の襖絵で、余白が多々、松の幹やしなれた枝の一部分が墨で大きく力強く描かれている。瞑目(めいもく)し、お寺でその襖絵を前にする自分を想像すると、お寺の部屋はあたたかも自然の

覆いつくす黒い雷雲を思い起こした。建仁寺のホームページによると、昭和初期の台風で方丈が崩壊した際、たまたま襖を外していたため難をのがれ、現在は博物館に保管されているとのこと。さすが龍、不滅の芸術である。

「飲中八仙図」も好きで

戦国の激動の時代に近江浅井家の家臣の家に生まれた海北友松は、数奇な運命のもと絵師となり数々の作品を生み出したという。すべてが変化し価値観が変わる時こそ、普遍の真実や変わることにない美が求められ光放つのだらう。現代もその時代なのかもしれない。

かかれた人々が生きているか

水墨画だけでなく、光と色彩の絵もある。宮家のために描かれた金碧(きんぱく)き)びょうぶの「浜松図屏風」では、日を反射して輝く砂浜が金箔(きんぱく)で表現されており、松の緑が鮮やかである。海岸線は優美で、細かく描かれた波が重々動いている。ここには光あふれる異次元の空間がある。

のようである。

米國ネルソン・アトキンズ美術館から60年ぶりに里帰りしたという、「月下溪流図屏風」も素晴らしかった。

た溪流が、梅の花や椿や松とともに幻想的に描かれ、詩情あふれている。どの作品もサイズが大きく存在感があり、その場を離れ難かった。

い。